

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494



建造当時の第5福竜丸。昭和22年・和歌山県古座町の古座造船所

## 第5福竜丸持ち帰る

桃木夏彦

言ったのである。

「はあ」とそれだけ言って、あとは黙っていた。「わいは酔ってへんけどな、そやけど変な木でんな」

取材で第5福竜丸展示館を訪れた時、ちょうど船内の清掃と、朽ちてきた内部の補強作業をしていた。一九八四年の一月のことだった。

船底から弾頭が二百二十二個、それにコンクリートブロックが百個も出てきた。驚いた。

何のためにそれらを入れたのか。議論した結果、アンバランスであった船の均衡を保つために使われた、という見方が有力となった。

その補強作業の折、朽ちて、ほうりだされた船の木片を二本もらってきたのであった。

「ほう、その木、記念にもろてきたんかい」。そう言うおっさんに、紙袋の中の朽ちた木を出して見せた。

しかし、見ようともせず、

「もう放射能はないやろな」、と一言残して席をかわってしまっ

第5福竜丸が、ビキニ環礁でおこなわれた米国の水爆実験で「死の灰」を浴びる七年前の一九四七年三月二〇日。私の故郷、和歌山県古座町の古座造船所で進水した。マグロ・カツオ漁船第七事代丸としての船出であった。が、その後、静岡県焼津に売却されて第5福竜丸となった。

つまり、紙袋の中の二本の木片を持ち帰ることで、船の故郷へ「里帰り」させてやろう、と思っ

この二本の木片の里帰りによって、地元では、「嫁にいった、第5福竜丸に会いにゆこうよ」という意見が子どもたちからでた。

毎年、故郷から展示館への修学旅行生が増えているが、「かわった土産もんでんあ」と大阪弁のおっちゃんと言った木片が、大きく役立っているような気がする。船の存在を、きちんと故郷和歌山から見続けてゆくことが、私たちにあって大事なことです。

(放送作家)

## 核軍縮提案とその後を学んで

三・一ビキニ事件記念集会ひらく

二月二十八日、東京の文京区民センターで、協会主催の「三・一ビキニ事件記念集会」がひらかれ、およそ四十名が参加しました。ビキニ水爆実験被災から三十八年のいま、世界は大きく変わり、ビキニ事件を画期とした冷戦構造とその柱でもあった原水爆は存在そのものが根本から問われ、原水爆のない未来を築きあげる新しい条件がひらけつつあります。集会はその条件をどうとらえ発展させるかの願いのもとに、服部学理事



3・1ビキニ事件記念集会 2月28日、文京区民センター

の司会により進行、川崎昭一郎会長が主催者を代表して、現在の情勢の展望を中心に挨拶しました。集会では「ビキニ事件に関する外交文書について」小川若雄理事が報告し、軍事評論家の梅林宏道氏が「プッシュの核軍縮提案とその後」をテーマに一時余余にわたって記念講演を行いました。小川理事は、昨年十月末、公開された外交文書の構成と特徴、数々の極秘文書のなかではじめて明らかにされた内容を、数回の

## 三・一を前に、見学会あいつぐ 澄んだ合唱も船にこだまして

暖冬とはいえない冷たい潮風が吹きつける二月十二日、今年も日本山妙法寺の平和行脚が展示館前を出発、焼津の久保山愛吉さんの墓前にむかいました。早朝凜としてたつ船首を前に出発集会、南無妙法蓮華経の読経と団扇太鼓が館内一杯に響き「憲法第九条は世界の宝」の横幕がひるがえりました。焼津への行進にあい呼応するかのよう、三・一を前にたくさん

学習研究会の討議と用意された資料にそって多方面にわたって報告しました。機密の保持を最大の眼目に、死の灰の分析、船体の処置、乗組員の治療方法など、発表の検閲さえ要求していたアメリカ側と外務省の交渉姿勢も明らかにされました。

梅林宏道氏は、いま最大の関心事である核軍縮の行方を、詳細なレジメとデータをもとに簡明に解き明かしました。昨年夏のS.T.A.R.T条約調印「プッシュ・ゴルフ」の両提案一月のプッシュ一般教書とエリツイン提案とあいっただ、一方的削減の実質と名目

見えない放射能の恐ろしさを全身で学びました。

二月二十五日来館した練馬区の谷原小学校四年生六〇名は、全員で折った折鶴を贈り作文を読み、「久保山さんも船を守って下さったみなさんも聞いてください」と全員で澄んだ合唱を船にこだまさせました。

「：ひろしまのある国で、しなければならぬことは、残るいくさの火種を消すことだろう」。

「お詫びと訂正」前号三画、上野敏彦氏の文章中誤植がありました。二段五行目「平均年齢は約四十七歳」↓「平均年齢は約二十七歳」。



工藤敏樹さん(右)と筆者  
松本楼で(1990年6月)

人間、喜びがあっても、その数以上の悲しいできごと、遭わなければならぬのだらうか。  
二月十二日、あの久保山愛吉さんや、鈴木隆さんを見送ったときと同じように、同じ代々幡斎場で三度目の悲しみをかみしめることになってしまった。  
肝臓ガンという嫌な奴が、かけがえない大切な人、私の手記『死の灰を背負って』の編集や出版のすべてを支えてくれた工藤敏樹さんを、選りよって。  
それにしても死の三日前、虎の門病院のベッドで見たあの笑顔

「その道をつくして死するは正命なり」

工藤敏樹さん(元NHK研修センター理事)をしのんで

大石又七

や言葉、あれはなんだったのか。あまりのあつけない最期に、今更ながら人の命のはかなさを思わずにはいられない。  
工藤さんは昭和三十三年、東京大学文学部を卒業し、ちょうどラジオからテレビの時代に移りつつあったNHKに就職した。そして高度成長期にさしかかった戦後の時代において、そのひずみの中で揺れ動く人びとの心の奥に目を向け、鋭く、時代をえぐり、人間の本性に迫るヒューマンドキュメンタリーの基礎を築いたジャーナリストの一人であった。  
夢の島に捨てられていた第五福竜丸を発見し、保存運動へのきっかけとなった、ドキュメンタリー『廃船』は、忘れかけていた私たちの目を開かせた。  
工藤さんの霊前に捧げられた先輩、友人五人の弔辞に、私はこみあげてくるものをどうしても押さえることができなかった。

大手術のあとで、あの人には限られた時間しか残されていなかったのだ。それでも私の家に来て、読み書きなどおおよそ縁遠い私のような者を相手に、ひとつひとつ教えてくれた。もどかしさを押さえるのも、大変だったことだろう。申し訳ない気持ちでいっぱいだ。神様も意地が悪い。  
目を閉じると、交わした言葉のひとつひとつが、しぐさとともに生き返ってくる。  
お付き合いは三年足らずの短い間だったが、中身は十年、いや子どもころから知っていたように思えてくる。歳が同じだったからだろうか。  
私は、二月十日の日記帳をめくるのがとても辛かった。しかし偶然にも、そんな気持ちをなぐさめてくれるかのように、そのページの頭に、誰の言葉かこんなことが書かれていた。「その道をつくして死するは正命なり」。私はその言葉に救われたように、そこにそのまま書いた。  
そして棺の中へ納めた私の本『死の灰を背負って』にもその言葉を書き添えて、お世話になったNH

Kの中田整一さん、新潮社の伊藤貴和子さんのサインとともにたずさえてもらった。  
今この本をもとに工藤さんの後輩のみなさんが、番組を作っている。それを見ることもできず逝かれたことを、誰よりも爽子夫人が悔やんだ。本当に残念だ。  
工藤さんは言葉にはしなかったが、あなたがこれまで何を考え、何を私ににおうとしていたのか、今少しりと重いものを感じている。分らないことがあっても、もうたずねることはできないが、平和への方向だけは見誤らないように、これからも頑張っていきたい。  
工藤さんの遺された大きな仕事や功績が、力となって、しっかりと守ってくれると信じているからだ。  
工藤敏樹さん、尽きない思いですが、お別れしなければなりません。本当にご苦労さまでした。ありがとうございます。安らかに安らかに、お眠りください。  
一九九二年二月十二日  
(第五福竜丸乗組員)

ビキニの海は忘れない⑤  
ビキニ被災船員の会

山下正寿



ビキニ被災船員の検診

高知県のビキニ被災調査がすすむなかで、被災者自身が「私も死の灰を見た」「キノコ雲を見た」と名乗りでて、県民のなかにビキニ被災問題がクローズアップされてきた。  
調査から三年を経て、一九八八

年五月一日に、第一富佐丸の元漁労長・稲妻昂(六七才)さんのよびかけで、被災者一人一人を含む関係者二六人が集まり「高知県ビキニ被災船員の会」が結成された。事件から三四年の歳月を経て再びビキニ事件の実相を問う正す証人たちが現われたことになる。会は県に対し、①被災船員のガンをふくむ定期的な健康診断の実施 ②ビキニ被災実態の調査 ③「原爆二法」の適用を政府にはたらきかけることなどを求める請願署名を開始し、宿毛・大方・土佐清水・室戸で会を開いた。  
室戸は、ビキニ事件直後は全国の先頭をきって漁民が抗議行動に出ながら、「騒ぐほどマダゴロの値段が下がる」ために運動を補償金獲得にしばらくはじめ、ついにアメリカの慰謝料が支払われてから、事件をタブー視した。そのためビキニ被災調査の初期は厚い壁にさえぎられて冷やかな対応しか得られなかった。しかし、被災船員の深刻な健康状態が明るみになるにつけ、タ

プーを打ち破ることになった。高知生協病院の森清一郎医師はビキニ事件の時に、東京の民医連のよびかけで焼津の市民の被災調査に参加した経験をもっていた。森医師のよびかけで室戸で二回の「放射能と人体」についての学習会が開かれ、一九八九年一月二十六日の「健康相談会」には、四七名の被災船員が参加した。  
このとりくみは、被災船員自身が働きかけたはじめてのものであり、よびかけ人となった谷祐利さんは次のように語っている。  
「私は今回の健康診断の呼びかけに参加しました。同年輩の人や近所の人、親戚の者にもあたってみて感じたことは、みんな年金受給者の歳になって健康が気になっていいる人が多いことです。そして放射能の影響というものを解明したいということでした。心の内では影響があつてほしくないが、体が悪くなったら「ひょっと放射能の影響か」という気持ちがあります。もう少し早くやってみてほしかったという思いです。今年の八月に高校生たちが聞き取り調査にやってきました。今になって、何十年も前のことを掘り出すことは、大

変困難もあるでしょう。それなのにわざわざ幅多から来て、何の欲がらみでもない、今の世の中にあつて珍しいと、私は感動しました。本当の水爆とは何だったのかという、真理に向かう姿。別れるとき握手を求め「ありがとうございませう。お元気で」といった言葉や態度に現れていた純真な性格。そういう子どもたちに感動し、このビキニ問題をもう一度考えてみるきっかけとなりました。」  
診断にあつた森医師は、ビキニ事件当時にすでに放射能による急性症状を経験した人がいること、胃かいよう経験者、手足にしびれを訴える人、増血機能障害の人が多いなどのデータを発表した。さらにガン治療経験者とガン症状の人の比率が異常に高いことなどから早期発見のためにも行政による定期検診を求めた。  
高知県ビキニ被災調査団の調査でも二百四十一人中七十七人がすでにガンや心臓病などの疾病で年若くして死亡していた。一年ごとに被災船員の病状は悪化しており、救済の道を希求している。  
(高知県ビキニ被災調査団員)